

2024年4月20日

2023年度「多摩地域市民活動公募助成」事業実施報告書

団体名 オトDAN☆Tokyo
 代表者・役職名 氏名 連絡担当 遠藤由香

▼報告書の扱い、および記入にあたっての注意点

この報告書(精算報告書以外)は、ホームページなどで公開する予定ですので、広く読まれることを想定してご記入ください。また、編集段階で、表記・表現等を事務局で編集する場合がありますので、あらかじめご了承ください。語尾の表現は「です・ます」調をお願いします。報告書に掲載するため活動の内容がよくわかる写真(2枚程度。写真の肖像権問題がないものの提出をお願い致します)を添付して下さい。

1. 助成プロジェクト名

楽しむことをあきらめていた人に音楽とダンスを届けたい！

2. 団体の概要(創設の経緯、創設時期=法人で、法人化前に任意団体での活動がある場合、その段階からご記入ください。会員数など。180文字程度まで)

障害があることでダンススクールに通いづらい人たちに安心して参加できる音楽とダンスのサークルとして2020年9月に発足。特性に合わせてひとりひとりが輝ける、非日常を味わえるような空間を目指して活動。参加人数は年々増加し、出張訪問ワークショップと合わせると、毎月50名ほどが活動する規模となった。多種多様なメンバーはどんな人でも楽しめて、それぞれが受け入れられ認め合える環境で、エンターテインメントを味わうことができると好評で、市内のイベントからのオファーやワークショップ依頼もいただけるほどに成長した。

3. プロジェクトの目的とその背景(※応募申請書に記載のものでも可) 250文字程度まで

音楽やダンスを楽しみたいけれど、障害があることで一歩を踏み出せなかったり、チャレンジしても集団になじめずに諦めてしまっていた人たちの、ストレス発散の場として、またアートやエンターテインメントを通して非日常のドキドキを味わってもらう場として、家族で参加できる環境を提供するのが目的。設立から3年以上が経ち、参加者は音楽とダンスによって表現することの楽しさ、気持ちよさを存分に味わってもらえるようになった。2023年度は撮影や発表にも挑戦し、障害者本人だけでなく家族も笑顔で元気になれるようなイベントを企画することを目標とした。既存のダンススクールやレッスンの概念を壊し、常に参加者主体のワクワクする空間を提供することを心掛けている。

4. プロジェクトの内容(※当初予定と変更がない場合は、応募申請書に記載のものでも可) 300文字程度まで

助成金を生かして毎月ゲストを呼んで、プロのアーティストたちと肩を並べて表現活動をする事ができた。バレリーナや、テクノダンサー、振付師、音大の卒業生サークル、打楽器奏者、ヒップホップダンサー、ダウン症ダンスチームなど、様々な分野の方々とコラボワークショップをひらき、「毎日が神回」を目指して活動した。バレエは夏に「眠れる森の美女」、冬に「くるみ割り人形」を、参加型バレエ公演として、アドリブ劇にも挑戦した。Eテレの子供番組の振付師を招いて行ったワークショップでは、音と光を使った幻想的な空間で、身体表現の幅を広げることに成功した。音大の合唱サークルでは、おなじみのポップスを生演奏と素敵な歌声で堪能し、輪になって踊ることで幸せな空間を作り上げることができた。そのほかにも地元のキッズダンサーや地域の夏祭り参加者などとの交流もたくさん生まれた。市民ホール40周年記念行事や、近隣の市のイベントに呼んでいただき、老若男女問わず全世代が同じテンションで楽しめる、BONDANCE(新しい盆踊り)や、ハロウィンディスコという新ジャンルを確立して話題を呼んだ。市内の障害者施設との提携も順調で、参加希望者が定員を超えるなど、好評いただいている。

5. プロジェクトの実施で得られた「結果」(OUTPUT。実施回数や参加者数など)、「成果」(OUTCOME。事業によって生まれた直接的な変化)、「社会的な変化」(IMPACT。事業が社会に与えた影響)などの『効果』 300文字程度まで

今年度は内容の濃さがこれまでと圧倒的に違い、充実したワークショップを行うことができた。助成金のおかげで、電子ピアノとバレエのバーを買うことができ、リトミックや音楽療法を効果的に取り入れたり、バーに頼って身体をストレッチさせることで、身体の可動域が飛躍的に大きくなった。

成果としては、参加者の成長が目覚ましく、これまで人間関係がうまくいかず職場などでトラブルを起こしていたようなひとが、ダンスで自信がついたことにより、立ち振る舞いも堂々とし、気持ちの上でも余裕が出て、周囲に思いやりの気持ちを持てるようになったりした。また、自分を思い切り表現する場があるという安心感で、これまで挑戦しなかったようなコンテンツにも心を開くことができるなど、社会生活を送る上でもオトダンの活動が良い影響を及ぼしていると、家族の方から嬉しい報告が相次いだ。

社会的な変化としては、ボランティアを申し出してくれる方や子供が増え、オトダンと関わりたい、と思ってくれる状況を作り出したことが大きい。障害のある、なしという垣根が、オトダンの周囲ではどんどんなくなっていくのを感じた。次年度は、障害のある人もない人も一緒に舞台上に立とう！という大きな企画も持ち上がり、地域からも注目される活動ができたと感じた。

6. プロジェクト実施にあたっての課題、今後の展望など 300文字まで

常に予算とのたたかいであり、参加費をいただくにしても、障害者の給与水準は一般的な給与の1割ほどであることも多く、なかなか値上げはしづらいのが現状である。ゲストアーティストを呼んで活動していったり、必要な備品を購入したりするためには、資金の確保のことを常に考えなければならない。オトダンへのワークショップオファーを増やして、団体としての収入に結び付けられるようにしたい。活動内容や、参加者や家族との関係性、地域とのつながりについては非常に良好であるため、特に課題はないが、常に誰も考えないような新しいことをして発信しつづける存在でありながら、敷居が高くならないよう、常に手の届く、安心できる団体でありたい。

7. 参考資料:プロジェクトで作成したチラシ、パンフレットやマスコミで紹介された記事等の現物またはコピー、活動状況の写真などを、“必ず”、別途、ご提供ください。





